



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

筆 者ピーター・フランクルはご存知のとおり、数学と大道芸「ジャグリング」の天才である。本書を読むと天才というものが、古来よく言われてきたように1パーセントの才能と99パーセントの努力で花開くものであることがよく分かる。

ほ くは、問題は（解けなければ解答を見るのでなく）自分の力で解くべきだと考えて、それを断固実行したのです」と言う。1時間かけても解けない数学の問題にぶつかると、彼はベッドの下の引き出しに入るのである。「まったく暗闇の中です。その身動きができない状態で数学の問題を考えたのです」。これは努力というより執念というべきであろう。

こ の執念の話は随所に出てくるのだが、本書のテーマが「らくらく学習術」である以上、なる程と思わず膝を打つ現実的な学習術も盛りだくさん登場する。

た とえば外国語学習法である。本書を書いたとき彼は日本滞在歴約10年であるが、すでに「いんじゅんこそく因循姑息」などという言葉を使いこなしている。漢字やことわざは寿司屋の湯飲みの、例の魚偏漢字など（寿司屋によっては湯飲みに、犬棒かるたが書いてある所もあるらしい）使えるものは何でも利

用する食欲さの例が語られ興味深い。

ま た外国語の日常会話習得のための、会話学校の選び方や入学のときの心得が示唆的である。①知り合いに会わないであろう場所にある学校を選べ。②そして入学手続きのとき、架空の名前と住所で登録せよ。つまり引きずっている日常の自分から解放され新しい別の自分に変身しろ。そうすれば恥もこだわりもなく外国語に立ち向かえるであろう。これは大胆な提案だが、特にわれわれ日本人には的を射た提案であろう。

ま た外国人と喋っているとき、決して日本語で「何と言えいいんだっけ」などつぶやくな。英語の場合なら“How should I say in English?”などと英語で呟け。それでないと大変相手に対して失礼だ、というのである。これには筆者（小生）も長い間気づかなかった。ごめんなさい。

学 力をつけるのには「人間として自信を持つことが必要」の項目では、自分自身の例を出す。学生時代、彼女に「あなたは私より背が低い」と振られ、自信喪失のどん底に落ち込む。そして立ち直るために「他人よりすぐれた何かを獲得しよう」といろいろ模索した結果、ジャグリングに行き

着く。この話などは、読みながら大笑いした後、しみじみと感動してしまう。

ま た彼は算数オリンピックの理事をしているのだが、ある年出題で「うっかりミス」をしてしまい（解答不能ではない）、そのことでかえって12歳の日本の子供たちの発想の豊かさを発見する話も面白い。

た だし本書は概して日本の教育に関して批判的である。特にきまりが多すぎて自由がない点である。たとえば漢字の書き順で、右という漢字と、左という漢字のナはなぜ書き順が違うのか、なぜ決まった通りに従わねばならないのか。このような例をたくさん出して来る。そして国語の反対語で「輸出品」の反対語は「輸入品」と答えると、駄目です、正解は「舶来品」です、という例も出される。えっ、それって本当かいなど、一瞬どきっとするのだが、これは彼一流のブラックユーモアではないかと考えることにする。

日 本の教育関係者にとっては、合理的抵抗を感じる記述も出てくるが、「あとがき」で最適な学習法とは人によって違うのだから、本書はそれを模索するための参考にして欲しい、と彼が語っているように、その意味ではたいへん実際ので内容の豊富な好著といえよう。



◀『ピーター流らくらく学習術』
ピーター・フランクル著
岩波ジュニア新書293
定価 本体740円＋税